

〈論文〉

岩橋武夫研究覚書—その歩みと業績を中心に

A Study of IWAHASHI Takeo : His life and his works

室田 保夫

Abstract

This paper reviews the life and works of Iwahashi Takeo. Iwahashi made a huge contribution to the welfare of the blind and visually impaired in Japan, but to this day, there have been a limited number of studies documenting his life and works. Iwahashi Takeo was born in Osaka in 1898. As a student at Waseda University, he lost his sense of sight and became deeply discouraged. However, he regained his hope by learning Braille and entering Kwansei Gakuin College in Kobe. After graduating college, he left for England to pursue studies at Edinburgh University. Later, Iwahashi returned to Japan to become a teacher at Kwansei Gakuin University and devoted his life for the welfare and enlightenment of the blind and visually impaired. In 1936, he founded the Lighthouse in Japan. Iwahashi also wrote many articles and had many contacts with well-known figures such as Helen Keller who visited Japan to support Iwahashi's endeavors. This paper provides a comprehensive overview to Iwahashi Takeo's life and his works.

はじめに

近代日本における代表的なキリスト教社会事業家といえば、留岡幸助、石井十次、山室軍平、賀川豊彦らが想起されるが、日本にライトハウスを設立し障害者福祉に貢献した岩橋武夫について、これまであまり論じられてこなかった。そして岩橋は社会福祉の歴史からもほとんど忘れられた存在でもある。しかし、戦前戦後に亘って視覚に障害のある人々に対しての先駆的な活動、賀川豊彦らと共に神の国運動に参加しキリスト教界にも多大の貢献をし、また永きにわたるヘレン・ケラーとの交友等もあり、社会福祉界を中心に大きな足跡を残した彼の人生をみれば、先の人物らと比較しても決して劣ることはない。とりわけ賀川をして岩橋を「If Helen Keller may be called the American miracle, Takeo Iwahashi may be regarded

a Japanese miracle」¹、すなわち「日本の奇跡」と呼ばせたように、ヘレン・ケラーとの交友は特筆すべきものがある。また一方で盲界の人々のみならず、英文学者寿岳文章や一燈園の西田天香、エスペランティストのエロシェンコらとの交わり、さらに戦後においても身体障害者福祉法の成立における貢献や世界の盲人達の組織活動、海外に於ける活動も決して看過することができない。加えてクエーカー派を中心にしたキリスト教活動等々に窺えるこうした業績にもかかわらず、これまであまり研究の対象とされてこなかったのは、むしろ不思議なことと言わなければならない。さしあたり岩橋について、その周辺を含め先行研究についてみておくことにしよう。

彼の生涯について比較的早い段階で論じたものに、ライトハウス創設40年を記念した著『日本ライトハウス四十年史』（日本ライトハウス、1962）

がある。もちろんこれは表題からも窺えるように、ライトハウスの歴史を概観したものであるが、その創設者である岩橋武夫についてかなりのスペースをとって触れられている。また戦後、その事業を継いだ岩橋の息子英行が書いた『青い鳥のうた』（日本放送出版協会、1980）にも、ヘレン・ケラーとの関係をとおして岩橋の事績に言及されている。そうした中で、関宏之の『岩橋武夫－義務ゆえの道行－』（日本盲人福祉研究会、1983）という著が刊行されることになる。²これは盲人福祉のシリーズの一冊であり、77頁のコンパクトに纏められた伝記であるが、岩橋の生涯がはじめて一冊のものとして世に出されたもので、今日の岩橋武夫研究の基礎を作っていると評価出来よう。その後、日本ライトハウス21世紀研究会『わが国の障害者福祉とヘレン・ケラー』（教育出版、2002）という著においても、岩橋の業績が関宏之らによって論じられている。³

ところで岩橋をその研究対象として論究したものとしては杉山博昭の「障害者問題における戦争責任－戦時下の岩橋武夫を中心に－」『障害者問題研究』23－4（1996）（同著『キリスト教社会福祉の史的実践』大学教育出版、2003、収載）という論文がある。ここで杉山は岩橋が平和主義を目指すクエーカー派の一信徒でありながら、第二次大戦中、如何に日本の国家政策に追随し、戦争協力をしていったかを指弾している。

岩橋個人やライトハウスについては従来、社会福祉史の中で、ほとんど触れられてこなかったし、また一方、キリスト教史からも詳しく取り上げられているわけではない。換言すれば社会福祉史のみならず、日本のクエーカー史、キリスト教史においても当然、評価されていい人物ではないかと思われる。加えて障害者福祉の歴史や人権史という分野から、もっと光を当てていかなければならないのではないかと思われるのである。

筆者は先に『人物でよむ近代日本社会福祉のあゆみ』（ミネルヴァ書房、2006）において岩橋をとりあげ、簡単にその人生と業績を紹介したが、紙幅の制限もあり、生涯の概略を論じたにすぎないものであった。本論では上述の研究状況を踏まえて、さしあたり彼の生涯を7章に分けて、岩橋の人生を概観したものである。⁴すなわち先の拙論を大幅に加筆し、彼の生涯と足跡を概観し、今後の岩橋武夫研究の課題や方向性等について論じたものである。その意味で章に対応する大凡の時期区分も仮の便宜的なものにすぎない。したがって研究課題を包摂した、まさに筆者にとって、今後における岩橋武夫研究の「覚書」（ノート）的なものである。

1 その出自、希望と暗転、そして母

(1) その出自と失明

岩橋は日清戦後、19世紀末に生まれ、明治、大正、昭和の3代を生き、戦後日本が占領政策から独立していく1954（昭和29）年までの半世紀余の時代を生きた人物である。彼の畢生の事業たる障害者福祉においてはまだ黎明期と称してもよい戦前期、そして身体障害者福祉法が成立した戦後という時代の中で、ライトハウスの創設等、その先駆となるべき多くの足跡を残すことになる。そうした彼の生涯を考察するにあたって、まず、我々は彼の青年時代の奈落の底に落ちるが如き体験と母の愛による挫折からの新生、そして思想的原基とも言えるキリスト教への回心を理解しておかねばならない。⁵

岩橋武夫は1898（明治31）年3月16日、大阪市東区南近江で生まれた。父は乙吉、母はハナである。父乙吉の家系は紀州藩士であり、維新後は鉾山開発に情熱を燃やしていた。武夫は1909年3月、大阪市南大江小学校を卒業し、府立天王寺中学校に入

学している。学生時代は野球と絵画の興味を持ったが、家の生業や父の勸奨もあり、16（大正5）年4月、早稲田大学理工学部採鉱冶金科に入学することになる。ここにおいて帝都にて勉学に励み、岩橋家を一層盛り上げて行くはずであったが、そうした順風満帆な人生が一転することになる。つまり入学の翌年春、風邪が原因で眼を患い、網膜剥離と診断され、5月、失明の宣告を受けたのである。東京での闘病生活も好転せずに失意のどん底の中で帰阪することになる。

また早稲田を辞め帰阪した岩橋をとりまく、さらなる不幸な事が生起する。岩橋家は第一次大戦後の不況による北浜銀行の倒産によって貧困の苦痛を味わう。こうした家庭の経済破綻により、住居の移動、妹は兄の看護もあり女学校退学を余儀なくされるといった不運が重なり、彼は塗炭の苦しみを味わうことになった。そして苦悶の上、1917年の大晦日、ついに自殺を決意し実行に移す。しかしその時、母の「何でもよいから生きていてくれ。お前に死なれては何処に生甲斐があるものか」⁶という愛の言葉で目覚め、岩橋はこれを「激しい価値の革命」「闇の中に発見された光」（『光は闇より』）と自覚し、過去を脱却し新しく生きていくことになるのである。ここには母の大きな存在を思わずにはおられない。このようにして1918年元旦は岩橋にとっての新しい記念すべき人生の出発の日となった。

（2）大阪市盲啞学校—光を得る

母の愛の言葉から「闇の中に発見された光」を見た岩橋は1918（大正7）年春、自己の将来と一方で家庭を補助する動機から、生業としての「按摩」になるべく大阪市立盲啞学校に入学する。⁷この学校の沿革は1900年、五代五兵衛が申請した私立大阪盲啞院に始まるが、07年に大阪市立盲啞学校と改称されたものである。ここでまず岩橋は点字の

習得に努力し、一つの文字を指先で読んでいくという出発点に立った。そして点字をマスターすることによって再度岩橋は生まれ変わっていくのである。すなわち指先で読むことによって失われたつあった世界が蘇えり、違った方法でもって世界を獲得するという新たな発見であり、それはまた学問の世界への復帰を意味した。かくしてホメロスやジョン・ミルトン、ヘンリー・フォセット、ヘレン・ケラーの如き人々のことを知る。また福音書をロンドンから取り寄せ、耽読しキリスト教への関心が深化し、とりわけヨハネ伝9章の初めの節は彼の琴線のふれるところであった。そして「苦悩、失敗、悲哀、罪過、病苦などを含む不完全なる現実の一切は昨日の単なる結果ではなくして、実は明日のより善き現在のために用意されたものである」⁸と。このようにして武夫は生きる光明を自らの手で切り開いていき、「闇の問題が一切解決された」（『光は闇より』）のである。

ところでこの盲啞学校時代、岩橋の心に大きな灯火をともしたのが熊谷鉄太郎という人物であった。⁹熊谷も視覚障害者で1913（大正2）年、関西学院に入学し、ベーツ夫妻や曾木銀次郎らと親しく交わることになる。卒業後は大阪市で牧会活動をしていた。18年、盲啞学校で講演した時、岩橋を感動させ、また熊谷は同校で聖書講習会を開くことになる。かくして岩橋は熊谷と親交を結ぶに至る。そして熊谷は自分が好本督から関西学院を紹介されたと同じように熊谷は岩橋を母校関西学院の英文科で学ばせることを勧めたのである。¹⁰また熊谷らの協力により岩橋は英会話、英書講読、英文タイプライター等を習得した。そして1919（大正8）年1月、母とともにキリスト教の洗礼を受けることになる。また当時、岩橋はエスペラントに興味を示し、「盲目の詩人」ワシリー・エロシェンコ（1889～1952）とも知己となっている。¹¹周知のようにエロシェンコは盲目のロシア人で、詩人、音

楽家、エスペランティストである。1914年に憧れの日本の地を踏み秋田雨雀や神近市子、そして新宿中村屋において相馬黒光、中村彝ら多くの文化人と交友をもつ。16年から東南アジアにいたが19年再度来日した。したがって岩橋は関西学院時代にかけて彼と交友をもったのだろうが、これに於いては岩橋のエスペラントというテーマとともに今後の課題としなければならない。そしてこのエスペラントとの出会いが一燈園、西田天香との出会いとなっていく。¹²

2 関西学院時代

こうして熊谷の勧めもあり、1919（大正8）年4月、岩橋は神戸にある関西学院の門をくぐることになる。もちろん当時の関西学院はまだ大学とはなっておらず、専門学校であり、原田の森と六甲を背景にした山麓（現在の王子公園付近）にあった。岩橋は文学部英文科に入学する。¹³ 彼は神戸において寮生活をし、多くの友人、教師と交わり新しい生活を始めていった。後年次のような寮生活の一端を伝えている。

その時分僕は啓明寮に入つてゐたのだが、僕等の同期生は今文学部の教授をしてゐる寿岳君に曾根、それから京大へ入つた内藤だつた。いつも四人集まつて僕の部屋で芋を買つて来てよく食つたものだ。そして授業に出ない時は小使が今豆腐屋が使つてゐる大きな鈴を持つて来て校舎で鳴らさないで僕の部屋の窓の下でジャンジャン鳴らしたんだね「岩橋さん……授業ですよ」と大きな声で云ひながらそして僕等が出ないとウズオルス部長が来てね窓の下から、「ハロー、ハロー」つてやるんだそれでも四人がこつそり黙つてゐると小使が「先生居らないのでせう、声がないから」と云つて、行つてしまふんだ、とつても痛快

だつたね……ハ、ハ、ハ、¹⁴

こうした学院での生活は後述する自伝的小説『動き行く墓場』（警醒社書店、1925）に詳細に述べられている。そして岩橋の日々の学院生活を支えたのは妹の静子である。大阪の女学校を中退し兄への献身は東京時代の失明時の看病から始まっている。兄の学業補助とはいえ男子校における紅一点としての存在は大変な苦勞であつたと想像に難くない。しかし級友のみならず、ベーツ院長夫妻や多くの恩師らによるサポートもあつた。英文科の同級生は寿岳文章だけであつたが、二人はライバルであり良き親友でもあつた。寿岳はウィリアム・ブレイクを岩橋はジョン・ミルトン（J. Milton）を研究した。ちなみにミルトンはピューリタンで当時の国教会を批判していたが、44歳の時、失明している。悲哀に満ち孤独の中で書いたのが、主著『失樂園』（Paradise Lost）である。岩橋がミルトン研究に傾倒していったモチーフは同じような境遇への共感によるのだろう。¹⁵ また後年岩橋は研究書『失樂園の詩的形而上学』（基督教思想叢書刊行会、1933）を上梓するが、関西学院時代その研究の礎とも称せる卒論「ミルトンのソネット研究」を書いている。¹⁶ その卒論の冒頭は以下のような岩橋の詩から始まる。

ミルトンよ、お身は今の時にありてなほ生くべし／英国はお身を要す、彼女はよどめる水の沼なり／そが古きイギリスの、内在せる幸福の特徴を失ひはてつる／剣に筆、炉辺、はた館、四阿のすばらしき富を変ぜかし／我等は利我の輩なり／お、我等を高くあげよ、再び我等に戻りきて／作法、徳操、自由、力をこそあたへかし／お身が霊を星のごとくにて彼方にぞ住む／お身が海のごと響きよする声を持ち／はだかなる厳けく自由の／大空に似て清やけし／そはゆゑに人生の常道を喜ばしき神々しさにて／旅ゆくもお身

が心は／彼女の上にすぐれて謙遜なる義務を
ぞよこたふ。

序説の頭に「ミルトンの詩作中であってソネットが如何なる地位と関係を持てゐるか、それが又英文学の見地から見て、何辺にまで研究さるべき性質のものであるかを論じやうとするのが、此の論文の目的である」として、以下17章と結論まで大部な卒業論文となっている。ちなみにこの卒論の筆記は妹静子がしたと思われる。

一方、岩橋は学問の探求のみに終始したのではない。学生時代から視覚障害者の為の活動を展開し、同じ境遇の人々が置かれている劣悪な状況を改善する運動を手がけていったのである。『日本ライトハウス四十年史』の「あとがき」には「岩橋武夫先生が、簡易点字製版機と、手動式ローラー点字印刷機を購入して、エスペラント学習書など出版したのは、1922（大正11）年の秋であり、日本ライトハウスの歴史はここから始まる」とある。

岩橋は生涯、多くの著作を残すことになるが、1925（大正14）年12月、処女作『動きゆく墓場』を警醒社書店から上梓する。小説の出来はともあれ、この大著を執筆したのは関西学院の学生時代からと考えられ、著作に至るまでの作業には相当なエネルギーが必要であったことはいうまでもない。この小説のタイトルはミルトンの詩『嘆きのサムソン』からの一説「あゝ我が体、わが墳墓、わが動き行く墓場、葬られたる身にしあれども死にもせず」から取られている。著はハードカバーで650頁からなり、最後の「跋」は4頁、西田天香が執筆している。その末尾は「八月六日出港の香取丸は、此の二人を載せて、上海に出張中のブ（ブレイルスフォード一筆者注）さんにもあはせて英国に航つた。著者の眼は心的によく見える。此著書はこゝまでになる著者の血涙録である。著者にも著書にも幸あれかし」と。もちろん岩橋はこれを渡英までに執筆し書店に原稿を入れていたと考えら

れるから、この原稿は1924年から25年初めまでには完成していたと考えられる。ところでこの本は一応長編小説の体をとっているが、岩橋の関西学院での生活までの自伝的小説であることは一読すれば明らかである。

ちなみに後年、武夫の妹静子も自伝的小説を書くが、兄の小説執筆の当時のことにつき次のようなくだりがある。『『これが書けるやうな世界だけに、俺の生きる喜びがある』といふ風に、こつこつと左から右へ点字を手探つて、失明記を口述する兄がある。黒い眼鏡に心の張りきつている顔附、それに書かれて行く過去の思い出とを見比べては、幾度も泣けて来て読み返しもしできなかつたおしん自身（寿岳静子一筆者注）がある』¹⁷と。ともあれ自己のこれまでの心的な整理を意味していたと言えるか。

3 英国留学

(1) 大阪市盲啞学校教師、一燈園、そして結婚

岩橋は1923（大正12）年3月、関西学院を卒業し、この年設立された大阪市立盲学校に英語と国語の教師として赴任する。以前点字を習得した大阪市盲啞学校は1923年4月から大阪市立盲学校となった。ところで関西学院の学業と生活を支えてくれたのは妹静子であったが、彼女は級友寿岳文章の妻となっていた。したがって盲学校への送迎は一燈園から派遣されていた矢野きを（備後の矢野幸太郎の三女）であり、岩橋はこの女性と結婚することになる。矢野きをについては彼の伝記『光は闇より』で岩橋はふれているが、後年に『母・妹・妻 女性に与ふ』という著を著しここにおいても少し詳しく書いている。それによれば彼女は救世軍の結核療養所で働いていたが、彼女自身も病にかかり療養所で養生した後、看護の仕事をし、そして「道心止み難く一燈園に飛び込み、托鉢者

として私のところに來たのである。さうしてこの托鉢が縁となり、天香師の媒酌によつて、結婚したのであつた」¹⁸と。そもそも岩橋は一燈園とも繋がりが出ており、妻になる矢野きをや西田天香とはもちろん、既述したジャパン・クロニクル社の記者ブレイルスフォードとの出会いがあったことも重要である。

ブレイルスフォードは一燈園に興味をもっていた。また彼は岩橋の学問にける情熱を知り、知友のいるスコットランドのエジンバラ大学(Edinburgh University)への留学を勧めることになるのである。また留学に際し長男を英行と命名したのも彼の当時の気概が現れていると言ってよい。そして25年夏、岩橋夫妻は英行を日本に残し、多くの夢をいだいて英国へ旅立って行った。

(2) エジンバラ大学留学

岩橋は1925(大正14)年8月6日、妻きをと共に英国エジンバラに向けて解纜した。9月にロンドン、10月にエジンバラに着し、岩橋はここで27年7月末までの約2年間、エジンバラ大学にて勉学に勤しむことになる。エジンバラ大学はイギリス北部スコットランドにあり、1582年に創設された歴史ある名門大学である。岩橋は大学を卒えた後ロンドンに移り、12月16日まで約5ヶ月間を、盲人福祉の調査・研究のために費やすことになる。そして翌28年1月31日帰国する。エジンバラに約2年間、ロンドンに約半年、合わせて約2年半の英国生活であり、ここで学問とともに将来の仕事の方向性を確定することになる。エジンバラでの留学生活は妻きを書いた『菊と薔と燈台』という著に詳しく書かれているが、ここではその生活の一端を素描するにとどめることにする。¹⁹

当初エジンバラの下宿はサウス・クラーク・ストリートに面した4階建ての最上階の10畳ほどの部屋で、ベッド、食卓、机、台所があった。10月9日

から授業が始まる。彼の回顧から窺うと初年は英文学史(グリヤースン博士)、一般哲学(ケンプ・スミス博士)、宗教哲学(パターソン博士)の講義を受けることになる。

こうして異国での生活は2年目(1926年)に入っていく。6月には1年間の授業を終えて、哲学、宗教学を修了する。また7月にはラッドラム教授から提供された家に移る。250坪の家の立派な場を提供されることとなった。ちなみにこの年の7月31日から8月7日まで、以前から興味があったエスペ란トの第18回世界大会がエジンバラで開催されることになった。コンノート殿下を総裁、36ヶ国、1000名の参加があり、セントジャイル教会にて開催された。大会において岩橋は分科会の副議長となるが、こうした大会が丁度留学に合わせるように開催されたのは幸運であつたと言えよう。

翌1927(昭和2)年5月10日、長女恵品子が生まれる。そして5月20日、普通3年間のコースを2年間で修了し、その後口頭試験があり、7月1日学位授与式があり、MAの学位(Degree of Master of Arts)を取得した。²⁰ エジンバラ時代、彼はラッドラム教授らの影響もあり、クエーカー派の集会に出席していたようである。この時期、凡そ2年間、必死の覚悟で過ごし、多くのスコットランドの友の厚意を得て、所期の目的を達しエジンバラを離れることになったのである。

その後7月25日、ロンドンに着す。岩橋はさらなる文学や哲学の研究への意欲、オックスフォードかケンブリッジにおいて博士の学位を取得したいという希望もあったが断念し、好本督やクエーカー側の協力もあり、英国の盲人福祉、点字図書館等の研究に没頭することになる。この時の成果が後に『社会事業研究』等の雑誌、あるいは『愛盲(盲人科学ABC)』(日曜世界社、1932)に発表され、英国の盲人福祉や教育の実態が日本に紹介されていく。ちなみに8月30日付けの『マンチェスターガー

ディアン』に「日本人学生の成功—盲人の為に働く」²¹が掲載され、日本の一盲人の奮闘ぶりが紹介された。そして盲人福祉に関する調査を終え、12月3日の香取丸にて帰国の途に就く。ちなみに岩橋の大阪市立盲学校同僚宛書翰によれば、12月16日、熱田丸、ロンドン投錨。21日、ジブラルタル寄港、23日、マルセーユ着、コロombo、シンガポール、香港、上海を経て翌1928（昭和3）年1月31日、神戸着予定と記されている。²²

4 関西学院教師—研究、神の国運動、社会事業

(1) 関西学院講師として—学問の世界

1928（昭和3）年初春、帰国した岩橋は、4月からベーツ博士や寿岳の計らいで関西学院専門部で英文学を教える道が開かれた。当時文部省に提出した書類によると岩橋の科目は「英文和訳と名著研究」²³になっている。ちなみに29年、関西学院は原田の森から西宮市上ヶ原に移転し、32年、関西学院は更なる陣容を整え念願の大学に昇格した。

こうした中、岩橋は従来からの研究を続けていくことになる。寿岳が岩橋の死後、追悼文で「彼のもっている内面的な面を、もっと生かし、たとえばミルトン研究などでも、ほかに比類のない仕事を残させたかった」²⁴と書いており、確かに彼が学問の分野においてそれに没頭すれば、ミルトン研究を中心にして多大の業績を残せたことは想像に難くない。それを証明するように1933年5月に『失樂園の詩的形而上学』という研究書を上梓する。念願の研究書を著すにおいて「序」の中で「本著を『失樂園の詩的形而上学』と命名せる所以は、失樂園を以て単なる詩的形式の対象となさず、却て形式と不可分の関係にありと確信する宗教思想を、共にその対象と見做して、失樂園こそはクリスチャン・エピクとして、古今東西における極めて稀なる十字架の大文学であることを暗示しよ

うと思ふからである」と述べている。ミルトンについては彼の著書にもたびたび論じられるところである。例えば『暗室の王者』において「この『失樂園』を単に芸術上の作品として、詩として、文芸それ自身の立場から論ずる人がある。併しこの詩は単なる詩的情操によつて、ものされたものではない。キリスト教の精神が何処に存するかを知らないで『失樂園』を読んだとしたら、おそらくその価値は半減されるであらうと思ふ。『失樂園』はミルトンの大いなる人生観と宇宙観との証であり神の摂理の偉大に関する驚くべき説教である。」（236頁）とあり、彼の『失樂園』への取り組みのモチーフがかかる視点にあり、これは当初から一貫としているように思われる。

またこの時期、1930年自伝的な著『光は闇より』とその姉妹編とされる『母・妹・妻 女性に与ふ』という著を著す。周知のように前著『光は闇より』は岩橋を一躍有名にしたもので当時で10万冊を超えるベストセラーともなった。後著は彼の生涯に大きな影響を与え、そして感謝を捧げなければならない、身近な3人の女性について記したものである。その3人とは母、妹、妻であり、母「自殺せんとする女性へ 母によりて更正せる私より」、妹「愛に生きんとする女性 妹によりて新生涯に発足せる私より」、そして妻「神の国に生きんとする女性へ 妻と共に異郷の十字架を背負ひし私より」という3つから構成されている。この2冊は自伝的な内容からなり、岩橋の生涯を見ていくときの重要文献であることは言うまでもない。

1935（昭和10）年6月に刊行された『私の見た霊界と永世』という著には2回の講演が収載されている。一つ目は33年11月17日、大阪聖約翰教会での講演で、タイトルに「私の見た霊界と永世」という本と同名のタイトルが付されており、また二つ目はこれも同年11月8日、同教会でなされた講演で題目は「失樂園に現れた未来観と人類の運命」で

ある。そして彼はこの関学教師時代に後輩達に文学や思想・哲学を教授しながら、一方で、瀬尾真澄や本間一夫、大村善永、明田治雄ら多くの盲学生達に希望と夢を与え、将来該事業に貢献する人材を育てていったことは注目しなければならない。²⁵

(2) 神の国運動—伝道活動

昭和初期、プロテスタントのキリスト教界において賀川豊彦を中心にして、1930年より神の国運動が展開される。これはキリスト教の教派を超えた運動であった。クエーカー派の岩橋もこの運動に参加していくことになる。それは彼のキリスト教観や社会観と密接に結びついているといつてよからう。そうということが明証されるのは、この時期、上梓している信仰や伝道に関する著書から窺うことができる。これは主に神の国運動の一環とした各地での講演が主たるものである。1931（昭和6）年3月と翌年の3月に、『私の指は何を見たか』『暗室の王者』と題する講演集を日曜世界社から出版している。前著の「序」の冒頭には次ような文言がある。

私が英国から帰つたのは丁度三年前の今日であつた。帰朝後母校たる関西学院に於て、小さい教室の仕事を守つてきた私は、またいろんな形で神の国運動のため各地の伝道に御用を勉めて来た。その間貧しいながら学徒としての責任と、救はれた一個のキリスト者としての福音に対する使命とが常に私の全人を深い自己批判の法廷に立たしめてゐた。思索と体験、理論と実践、学理と信仰といつたつきせぬ課題が自己反省の最重要点として今も私の前にある。しかも内心の声はこの二つの立場の間に生き貫くべき一路が横つてゐることを指示して止まない。単なる学級の徒たり得ず、同時にまた伝道の器たり得ない矛盾がそこにある。しかも自己弁護ではなしに、こ

の矛盾が必ず解決される日のあることを信じて偽らぬ今の心持である。結局強ひてあるものたらんとする努力の代りに暫らくこの矛盾を抱いてはつきり分析し批判しやうとしてゐるのが今の私である。

そして「故に私は、もし神の御心に叶はば出来るだけ宗教性と社会性の認識を自己の内部に把握し、それを先づ自己とその周囲に実現したいものと祈らずには居れない。かうした心の所産としてこの書を先づ世に送ることとした」としている。

講演集第一輯『私の指は何を見たか』を上梓し、版を重ねたこともあり、一年後にその後の講演をもとにして、第二輯『暗室の王者』を出版する。ここでも「序」に次のように記している。当時の彼の心境を知る、あるいは上梓目的を知ることが出来る文章であると考えられる。「今や世を挙げて動乱しつゝある日、支那の天地に戦雲のたなびく日、社会は縦横に苦闘そのものを見せつゝある日、騒忙たるべき且つ悲哀たるべき私の心境は、不気味な程落ち着いて来た。そして私は一層確信を持つて、生命の王国と神による生活の偉大を現代に呼びかけることが出来る。悲哀と苦闘に勝ち得る生活のキイノートが、神を見た魂であることを強く力説せずには居れない。さうだ、苦しめば苦しむ程、悩めば悩む程、暗ければ暗い程、神の御手が感じられるではないか。日本の救ひのために、朗かな人生、平和な社会、愛の王国の克服のために、祈りたい念願で私は一杯だ」と。ちなみにこの著のタイトル「暗室の王者」はタゴールの詩からとったものである。少し内容に入っていくと「顧みに維新この方物質文明の異常な建設に成功した我ら日本国民は、余りに安楽椅子を夢見てゐはしないか。我らの文明を安楽椅子の上から救ひ上げて、もう一度本質的な人生の荒波を突破させ、これをゆくところに行かしむるだけの決意があるかどうか。国家の招来のみならず、我ら一人々々

の生涯にとつても、信念を以て突破するだけの決意ありや」(8～9頁)とあるような時代認識が窺える。さらに「我らは単に社会事業をするためにクリスチャンになつたのではない。我らは先づ救はれなければならぬ。我らは虐げられたる無産者のために解放運動をなすべきである。…略…魂だけ救はれて何になるかといふ声を聞くが、魂が救はれずして、全世界を得るとも何になるかと私は弁駁する」(57頁)とあるように、この運動は社会的な性格が強いものであったが、その点、岩橋はキリスト者として、精神的な福音の問題を第一義に捉えていることが窺える。

さらに岩橋は1932(昭和7)年7月に『星とパン』という著を教文館から著す。これは副題に「世界苦に臨む基督教」という副題がついているように1930年前後、日本では昭和初期に相当するが、世界大恐慌の時代であり生活難や思想的にはマルクス主義が流行していたときの危機感の中で出版されたものである。「序」に「今や国を挙げて内外時局、多難を思ふのとき、我らキリスト者は如何なる責任と自覚を持つて直面すべきか。そこにははつきりとした覚悟と生活の旗印がなければならない」と論じている。第一編第一章が「唯物主義とキリスト教」というタイトルが付されているように、キリスト教の立場にたつて、現状の思想的な課題、とりわけマルクス主義や唯物論に論究をくわえたものである。もちろん、岩橋の思想から唯物論批判が展開されている。ここには神の国運動に参加している背景があることはいうまでもない。²⁶そして、賀川豊彦との関係もあり、『神の国新聞』や『雲の柱』等にも論文を書いている。

(3) 愛盲運動と社会事業

上述したように、岩橋は関西学院時代より、学問研究に留まらず、視覚障害者の福祉向上ための運動や事業を始めていたが、英国においてもこの

問題に対して多くの知見を得ていた。1928(昭和3)年5月からは「自宅にはじめてライトハウス建設資金募集と、その目的を書いた看板を掲げ、ライトハウスの名称を世に宣言した」(『日本ライトハウス四十年史』5頁)。そして33年には大阪盲人協会の会長に就任している。また岩橋は社会事業関係や『盲教育』といった雑誌にこの問題についての論文を書き、あるいは著書を出版し、世論に訴えていった。29年にはアメリカにおけるライトハウス運動の中心人物、マザー夫人が来日することになるが、ここで岩橋はマザーの講演の通訳をしている。

そうした中で、岩橋は1932(昭和7)年12月、かかる盲人の社会事業に関わる初めての著『愛盲(盲人科学ABC)』を出版する。²⁷ちなみにこれはタイトルには講演集になっていないが、当時の日曜世界社の広告には講演集3となっており、さきの2冊に続く一連のものという認識がある。「序」の中で「本書の目的は一般社会人をして、盲人に対する真理の理解と同情を喚起することにある。私は盲人文化の現状並びに一般社会のそれに対する勝れたる諸施設を観察するにつけても、わが日本における同問題の未だ及ばざる実情や、余りにも冷淡な一般社会の態度などを慮り、こゝに拙著を以て為政者、教育家、社会事業家、特に一般世人の注意を喚起し、希くばこれを機会に盲人に対する真の研究が開始され、惹いては各般に亘る対盲人社会事業の発達進歩に資するところあらんとするものである」と書いており、岩橋にとって社会事業という言葉にみられるように、この分野に言及したものである。そして「『社会問題としての盲人』—そは盲人を人間として取扱ひ、失明による欠陥を、ハンディキャップとして社会が負担保護し、以て、国民文化構成の一員として、その天分を自由に發揮せしめ、人間らしき生活の保証を与へんとする盲人解放、即ち暗より光への運動に外

ならぬのである」(227頁)と。ちなみに36年に燈影女学院を設立し教育事業にも新しく機軸を広げていった。

5 ライトハウスの創設

(1) 渡米をめぐる

1934年8月から岩橋は北米に旅するが、その年の秋、チャールス・ディケンズの児童向けの小説『THE LIFE OF OUR LORD』を『主イエス様の御生涯』と訳して出版している。「序」にあたる部分で岩橋は「今度の米国旅行の目的は、一方に於てかうしたディキンズの書物が書かれたイエス・キリスト様のお教を説くためと、他方に於ては日米両国間にもつと親密な平和がうち樹てられたいと願ふからである」(3~4頁)とあり、この日付は8月13日となっている。そしてその2日後の15日に渡米したのである。

岩橋のこの渡米はカリフォルニア州日本教会連盟の招聘に応じたものであった。そしてこの時、日本基督友会はアメリカフレンド派の協力のもとでアメリカ東部における岩橋の講演会を企図した。こうして翌年一月にかけて、岩橋は全米への伝道と講演行脚となったのである。まず約2ヶ月間、西海岸を中心に在米邦人の為に講演し、11月19日にセントルイスに至り、同月25日にフレンド派の拠点フィラデルフィアに着し、ニューヨーク、ボストン等、東部地方において講演行脚をしていった。そうした中、岩橋個人にとって重要な課題はヘレン・ケラーとの出会いであった。岩橋はそれまでに小室篤次牧師にあって、ケラーについての多くの情報を得ていた。²⁸かくて12月18日、ニューヨーク郊外フォレストヒルにあるケラーの自宅において岩橋とケラーの出会いが実現したのである。岩橋は多くのことを語り合い、そしてケラーの日本への訪問を約束する。そして岩橋は翌35年1月13日

に帰国し、早速、大阪の地においてライトハウスの建設事業に取りかかることになったのである。

(2) 日本ライトハウスの創設とヘレン・ケラーの来日

1935(昭和10)年10月、岩橋の悲願であった「ライトハウス」が大阪の地に完成した。その主たる事業は各種集会の開催、はり、きゅう、マッサージ、点字等の指導、視覚障害者家庭への訪問教師の派遣、点字図書の出版と無料貸し出し、事業への調査や研究等であった。そして翌年4月、世界最初のライトハウス設立者ルファス・グレイヴス・マザー夫妻を米国より招いてライトハウスの開館式を挙行した。ここにおいて世界13番目のライトハウスとして公認されたのである。その建設費(1万5千2百21円)に対して、岩橋は6千5百円、西田天香2千円、三井報恩会3千円、大阪貯蓄銀行厚生会2千円等であり、岩橋の私財を抛っての建設であったし、一燈園の西田天香も多額の寄付をしていることも注目しておく必要がある。こうしてライトハウスの事業は具体的に展開していくことになる。

さてヘレン・ケラーの来日を懇望していた岩橋は、さしあたって彼女の存在を知らせるための仕事から着手し、36年11月、三省堂から『ヘレン・ケラー全集』全5巻を刊行した。いまここにその5巻を紹介しておく、以下ようになる。

第1巻『私の生涯』(其の一)、第2巻『私の生涯』(其の二)、第3巻『私の生涯』(其の三)、第4巻『私の住む世界』『私の詩集 石壁の歌』、第5巻『私の宗教』『私の詩集 闇の歌』となっている。第一巻の「原著者よりの挨拶」にはヘレン・ケラーの次のような文章が掲載されている。「私の書いた書物が日本語に訳出するだけの価値があるとお考へ下さつた由を承り、私は誠に光栄と誇りとを感ずるもので御座います。日本より寄せられたこの尊い讃辞こそ私のなした事業に対する大きな償ひと

なるばかりでなく私と共に同じ不自由を忍んでゐる多くの人々の心を激励するものであると私は信じて疑ひません。それはまた運命によつて待ち伏せの厄に逢ひながら、自らの誇りのために勝利に生きようと立ち上つた総ての人々の努力を認識する賢明な同情の発露でもあり、私をして世界は常に前進してゐるといふ事実を再び悟らしめる事件でもあります」と述べ、「日本の友、岩橋氏の精進によつて、昨年十月間に住む人々に捧げられたライト・ハウスは盲人達に対する日本人の目覚めた態度の喜ばしい証拠であります。それは光を恵まれてゐる人々から闇に追放された人々への慈恵の贈物として、永久に残ることでありませう」とある。

それぞれの巻の初めに、訳者の序が付されて各巻の説明がされている。第一巻は芥川潤、第二巻と三巻は兄玉國之進、第四巻は遠藤貞吉、荻野目博道、第五巻は島史也、荻野目博道との共訳である。共訳者の芥川、兄玉、遠藤、荻野目は関西学院大学の同僚であり、島は岩橋が経営している燈影女学院の教員であり、全体的な監修は岩橋があたっている。そして、1937年5月に芥川潤との共訳で『偉大なる教師サリヴァン』（三省堂）を著している。

岩橋は既述したように1934（昭和9）年12月、フォレスト・ヒルズでヘレン・ケラーと逢っており、その時、来日を約束しそれを心待ちしていたが、その悲願がやっと実現することになるのである。かくて37（昭和12）年4月15日、ついに岩橋の悲願であったヘレン・ケラーの来日が実現した。そして「奇跡の少女」のコピーで日本全土は歓迎の話題でもりあがった。18日東京では国賓級の大歓迎会が東京会館でもたれ、その模様はNHKラジオで放送され、翌19日には大阪で聴衆2000人を集め行われた。岩橋も登壇し「闇の歌は光りの歌であった、一生を闇とたたかいをつゞけてゆくケラー女史の顔をごらんなさい、なんとにこやかではあり

ませんか、哀しみを征服したにこやかさ、真に暗いものこそ真に明るい、われわれ運命にめぐまれない者にとつてケラー女史の来朝は真に新しい生命の出発を意味する」と自己の体験を語り、ケラーの人格を紹介したと報じている。²⁹

このように彼女は「平和の使途」として7月末の3ヶ月半、100回近い講演をしたが、岩橋は通訳として同伴した。³⁰ それは日本各地だけでなく、当時殖民地としてあった朝鮮や「満州」（中国北東部）にまで及んでいる。

丁度、日中戦争が勃発するときのことであり、翌年には国家総動員法が敷かれ、日本は戦時体制へと突入していくことになる。そうした中、帰国したケラーはルーズベルト大統領に日本の報告をし、そして1938年10月29日付けで大統領から岩橋宛に感謝状が贈られている。

親愛なる岩橋様

茲にヘレン・ケラー女史の手を通して、貴下が下さった菩薩の面一個、写真アルバム一帖並に大和紙に描かれた絵画数点を有難く頂戴いたすのは、私に真実なる喜びを与えるものであることをお知らせ致します。私はこれ等の贈物を、ただにその芸術的価値のためのみならず、又同時に貴下をしてこの贈物をなさしめるに至った善意の精神を深く感謝し、大切にしたいと思ひます。

貴下の真実なる ルーズベルト³¹

この時期、次第に日米関係が悪化していき、その3年後にはアジア太平洋戦争へと最悪の結末となるが、こうした交友は戦争前のひとときの休息であった。

6 戦時中の岩橋

(1) 燈影女学院の創設と『黎明』の刊行

『関西学院新聞』によれば、岩橋は1934年2月、

古屋女子英学塾の教頭に就いている。³² この塾の古屋登代子の経営になれるものであったが、これを岩橋は1936年2月からフレンド派のミッションスクールとして燈影女学院として運営していくことになった。この学校名の命名は一燈園にある塾（燈影塾）からとったものであり、したがって尊敬する西田天香もこの学校教育と経営に参画している。ここでは古屋女子英学塾からの伝統として英語教育に力点がおかれた。ユニークな学校経営において戦後も続いていくが、身内の不幸な事件をきっかけに1951年3月をもって16年間の門を閉ざさざるを得なかった。この女学校の教育の実態は岩橋の教育者としての位置づけとともに今後の課題である。

1938（昭和13）年8月、ライトハウスは『黎明』という点字の月刊機関誌を刊行する。その創刊号の「巻頭言」に岩橋は「黎明の誕生に際して」として次のような文章を書いている。少し長い引用となるが、この雑誌にける岩橋の思念が感じられ、労を厭わずみておくことにしよう。

……前略……しかしながら、かかる盲界非常時は、我等に悲観と絶望の原因になってはならない。否、祖国が日支事変を突破して光栄の歴史を東亜の天地に築こうとして黎明を待望しつつあるごとく、我等もこの危機と苦難とを突破して盲界の黎明を創り出さねばならぬのである。そのために盲界総動員の角笛が鳴り出さるであろう。そして、各自が各自の立場において全力を傾け、一致協力の実を上げねばならない。そこから生まれ来る公正な与論と涙ぐましき協力とが、初めて明日の黎明を招来することができるのである。この為に我等は起って、惜しみなき助けの手を伸べあい、黙して祈りを天にまで高く捧げ合おうではないか。

雑誌黎明は、こうした時期にこうした使命を目指して誕生したのである。それが総合雑

誌として一般社会の思潮や文運を紹介解説すると共に、他方、盲界独自の問題を捉え来ってこれを公平に論じ、入念に検討しようと志している。かくして科学や芸術の文化を向上進歩せしめるのみならず、各人が各々の内に深く内省して心の王国を訪ね、その信仰や修養を助長する為に役立とうともしている。この他、良き娯楽や趣味の門戸を惜しみなく開いて、豊かな情操と品性を養うべき手段をも講じようとしているのである。

これを要するに、雑誌黎明は、昭和の維新に臨んで国運の進むところ、民族の運命とその運命を友にしつつ盲界の維新を招来すべく、闇に住むあらゆる階級の人々に対して捧げられている、自由にしてくつ常に若々しき時代の象徴でありその饒なのである。日支事変は今や一周年を迎え、いよいよ聖戦はその最後の目的に向かって邁進し、上海・南京既に落ち、徐州また潰え、今日は九江陥落して、皇軍は破竹の勢いをもって「漢口へ漢口へ」と肉薄しつつある折からである。思へば記念すべきこの時にあたって雑誌黎明が呱呱の声を上げ得たことは、返す返すも意味深長なものがあるでないか。幸いに読者諸君の熱援に支えられて、漢口を抜かんとする皇軍の意気の如く、黎明が雄々しく健全に成長せんことを祈って、発刊の辞に代える。

このライトハウスの機関誌は岩橋をして「総合雑誌」「盲界の維新を招来すべき」と主唱するように論壇の拠点となっており、爾後、岩橋は毎号の巻頭言の他、論文や小説等を書いていくことになる。³³

(2) 愛盲会館と戦争協力

ところで岩橋のキリスト教信仰の基盤はクエーカー派（フレンド派）の立場である。周知のようにクエーカー派の重要な方針の一つには平和主義

がある。そして畏友ヘレン・ケラーも平和主義者であった。しかし第二次大戦中、岩橋は戦争への批判をした訳ではなく、むしろ国策に則った行動をしている。それは1942年の「今や大東亜共栄圏確保といふような不動の国策樹立に翼賛させなければなりません」³⁴というような発言ににも象徴されよう。戦時が激化していくにつれて、ライトハウスの名称は愛盲会館に改称された。全国の盲人のための事業は39年頃から、戦争のため両眼を失った失明軍人の救済と更正のための事業へと移っていった。その前の40（昭和15）年8月には岩橋を大会長として、「紀元二千六百年奉祝全日本盲人大会」と称して開催され、その決議の一つに「本大会の記念事業として、軍用飛行機『愛盲報国号』を全日本盲人の名において献納すべく、募金運動を実施すること（後、この運動はみのり、四万八千五百八十九円二十二銭が集まり、『報国第六一九号日本盲人号』と命名された）」³⁵とある。こうした岩橋の戦時の行動については、彼の個人的な平和思想という思いを背景に、クエーカー派の「平和」という問題とし視覚障害者の指導者として「国策への追随」といった事実を当時の状況の理解をとおして、彼の思想と行動との再考が要求されよう。³⁶

既述の『黎明』には岩橋の論説とともに小説の類も連載されることになる。その中で1942（昭和17）年3月、岩橋は戦時体制が背景として『石垣の声』という小説を上梓する。小説として出版するのは、以前関西学院時代に書き、エジンバラ時代に出版した自伝的小説『動き行く墓場』以来のことである。

さらに1943（昭和18）年1月に岩橋は『海なき燈台』という著書を国民図書協会から上梓している。本の扉には軍事保護院総裁本庄繁の「興亜愛盲」という題字が掲げられており、またグラビア写真には失明傷痍軍人やシンガポールに於ける戦勝祈

願の軍人たち、あるいは岩橋自身の海軍機の献納式の写真等々、如何に戦争協力をしているかを明証するようなものが掲載されている。「はしがき」には「この人生の暗黒界に難戦苦闘しつつある我が十萬同胞の存在を思ふ時、そしてそれが大東亜戦争の契機として日満華を含む南方諸地域に拡大された時、二百萬を以てしても尚数へ切れぬ夥しい数に昇ることを考へては、海なき燈台の使命たるものまた重且つ大と云はねばならない」と述べている。ここには10年前に『愛盲（盲人科学ABC）』を著し、そしてこれが「興亜愛盲の契」として位置づけているように国家の戦争という枠組みの中に愛盲運動は包摂されたのである。

1943（昭和18）年と44年、岩橋は「満州」（中国東北部）に行っている。特に44年には長期滞在し、現地の盲学校や盲人を訪れ、講演もしばしばして回った。44年3月、関西学院の学生は学徒出陣でとりわけ文学部の学生はいなくなった。そして岩橋は関西学院大学を辞職することになる。このような中、終戦直前の1945年7月、明田治雄を中心にしてライトハウスの空襲の危機からの脱出、そして失明軍人の身の安全を考慮して、奈良県吉野郡葛城村に疎開している。そしてすぐに終戦を迎えたのである。

7 戦後の岩橋をめぐっての素描

（1）戦後の活動

1945（昭和20）年8月15日、第二次世界大戦も終結し、GHQの指導下におかれ、占領政策が展開されることになる。GHQは日本の民主主義化を多くの分野において展開していくが、盲界の分野においても占領軍による改革が突きつけられることになる。岩橋は政治からの変革を志向し、46年の総選挙に立候補したが次点で落選した。

1947年には日本国憲法が公布され、その体制の

下、新しい社会体制が動き出した。社会福祉の分野も戦後新しい改革が始まり、旧生活保護法、児童福祉法が制定されていく。岩橋らは視覚障害者のための立法制定に向けて努力をしていき、かつ身体障害者福祉法の制定に尽力した。戦後の明るい話題の一つはヘレン・ケラーとの交友が再開されたことであり、彼女は再来日を約束する。³⁷

ところで岩橋が戦後の日本を生きるにおいて、反省を込め心に残っていたものは平和の問題ではなかったか。とりわけ平和主義を掲げるクエーカー派あるいは、その信仰者としてあった岩橋は先の戦争に対して協力していったことに対して何らかの反省から出発しておくことは当然であったろう。

岩橋は1949（昭和24）年9月25日、『創造的平和—クエーカーの思想とその実践—』という著を刊行する。岩橋によればこの著は終戦直後にも出したかったようであるけれども、その2年前日本は日本国憲法を公布し、とりわけ第9条において平和主義、戦争放棄を謳っており、かかる時代的背景をうけ多くの人類に大きな悲劇をもたらした戦争への反省的視点からこの著があることは言うまでもなかろう。内容はクエーカーのキリスト教教義や平和論が中心になっている。

「永遠のエルサレムへ」への通路は、かくして既にイエスが我等のために開き、「我に従わんと欲するものは十字架を負いて来れ」と呼んでいるのである。クエーカーの平和の殉教者としての二十世紀的価値がそこにある。わけても未だ五里霧中のうちに戦争抛棄を宣言した「平和憲法」を掲げている日本に於いておやである。わが国のクエーカーたる者、ここにきびしい反省がなくてはならない。数と物質に対する近代人の迷盲（マヤ）から覚めて、質と精神のより実体的生命に生きよう。（序に於いて「戦争と平和」3～4頁）

そして「世界を鉄のカーテンで真二つに分けて、

今や雨を呼ぶか嵐を呼ぶかの危機を思わせる今日
平和国家としての日本の存立を神かけて祈る私は、
祖国が狭い誤った日本世界観を十字架にかけて、
世界の日本、神の日本へ育ちゆくように待望すること切なるものがある」（同6～7頁）としている。

1948年8月17日、岩橋は大野加久二、鳥居篤次郎、中村京太郎らとともに周到な準備の後、日本盲人会連合を結成し、岩橋はその会長に就任した。副会長は大野加久二と磯島慶司であった。そして「時は来た。新時代の太陽は昇らんとしている。今回、はるばる来朝せんとするヘレン・ケラー女史の献身的愛盲の赤誠に応え、ここに拳国的な盲界の一大統合を期した我等は、敗戦の混迷と彷徨より立ち上がり、盲人の文化的・経済的向上と、社会的地位の躍進をはかり、すすんで平和日本建設のため、真に人道的使命に立脚し、社会公共のために寄与せんことを誓う」という「宣言」文を出し、次の5つの決議を採択している。³⁸

- 一、我等は、日本盲人の福祉と文化の向上のため、平和の戦士たらんことを期する。
- 一、我等は、世界的標準に立つ盲人社会立法の制定を期する。
- 一、我等は、盲聾啞義務教育の完全なる実現に協力する。
- 一、我等は、旧職業の保全と、新職業の開拓育成に努める。
- 一、我等は、今まさに展開しつつあるヘレン・ケラー・キャンペーンに対し、全面的に協力する。

このような背景の中で、ヘレン・ケラーの再来日が実現し、障害者の福祉は一步前進することになる。

（2）ヘレン・ケラー再来日と渡米、そして落日

岩橋は終戦から丁度3年目に当たる1948（昭和23）年7月31日に『ヘレン・ケラーアルバム』という写

真集を刊行している。そして8月15日、岩橋は『ヘレン・ケラーと青い鳥』という小著を出版し、彼女の2回目の来日を期待したのである。ヘレン・ケラーの来日は戦前の1937年から11年経っており、この間、戦争という悲劇をもたらした。

かくて、第一回目の来日同様、ヘレン・ケラーの来日キャンペーンがなされ、同年8月29日にそれが実現したのである。しかし前回とは違い、敗戦、そして占領下という心の傷と焦土からの復興への希望にかけて必死で生きていくという状況であり、こうした時期の来日は前回と違った意味ももっていた。一方、彼女は岩橋との再会と日本来訪という喜びはあったが、戦勝国としての複雑な心境であったことは想像に難くない。日本各地を講演していくが、とりわけ広島と長崎は彼女にとって重要な意味をもっていたと思われる。また身体障害者福祉法の成立に向けて貢献し、その法が公布されていき、障害者福祉において一歩前進となった。そして翌49年11月23日、ヘレン・ケラーの招聘を受け岩橋は渡米する。戦後の著しい米国の発展、視覚障害者達が置かれた実体を再認識し、日本の将来を展望していくことになるのである。戦後において該運動は日本からさらに世界的な規模において展開していくことになる。しかし岩橋自身、次第に健康が優れない日が続き、かかる時、岩橋と共に尽力したのは弟の文夫であり、そして息子の英行夫妻であった。

1954（昭和29）年8月、パリで第一回世界盲人福祉協議会総会が開催された。しかし岩橋は病に臥しており、参加することは叶わなかった。そして同年10月28日未明、岩橋は56年の生涯を閉じたのである。彼が昇天した翌日の29日の『朝日新聞』の天声人語は、その中で次のように岩橋の死を伝えている。

愛盲事業に一生をささげ、数々の業績を残したライトハウスの主、岩橋武夫氏の死を、

一番悲しむ人はおそらくヘレン・ケラー女史ではあるまいか。人間苦につながり人間愛に固く結びあった二人の交友は、二十年にもわたり、岩橋さんは、心の光としてケラー女史を仰ぎ、女史の二回にわたる来日の橋渡しをしたが、氏が贈った金色のカナリヤがなくなったとき、女史は可愛いタケオが死んだといって泣いたそうである。

岩橋の死から3ヶ月後の1956年5月28日、ヘレン・ケラーは75歳の老体でもって来日し、岩橋の墓前に花束を手向けるためにライトハウスを訪れている。そして後に岩橋の頌徳碑が建立されたが、その墓碑にはヘレン・ケラーの言葉「Takeo Iwahashi whose liberating mind shines upon the blind of Nippon」と刻まれている。そして畏友寿岳の訳文「その解き放つ心—日本の盲界に光り輝く、タケオ・イワハシ」と両脇にある。

おわりに

この小論において、岩橋の生涯と業績についての概略を論じた。「はじめに」にも述べたが、これは小生の今後の岩橋研究についての覚書でもある。彼の著書については大凡、披見することができ、著書目録は可能となった。しかし論文や書翰についてはまだ渉猟が十分でない。とりわけキリスト教系の紙誌についての調査は今後の課題であり、出来るだけ早く正確な岩橋の論文目録の作成が必要であると考えている。また日本ライトハウス所蔵の史料調査も十分に行えていない。点字雑誌とりわけ『黎明』の岩橋の論文についてはライトハウスのご厚意で読ませていただいた。しかし『点字毎日』や他の点字雑誌は渉猟が行き渡っていない。史料調査においてもこうした課題が残されている。さらに彼が関係している人物やそれに関係する施設や機関、学校等から多くの史料がまだ発

見出来る可能性もあろう。紙幅の関係もあり、この論文では岩橋の生涯における歩みと業績を中心に論じたので、個々の論文や著書の詳細な内容、また思想や理論について今後論じていく予定である。さらに重要なライトハウスにおける彼の事績についてもほとんど触れなかった。今後はここで指摘した多くの課題を中心に個々に論究していくことが必要であると考えている。

- 1 岩橋武夫『Light from Darkness』（教文館、1932）の賀川の序文「Introductory Note」から。
- 2 日本盲人福祉研究会のシリーズもので刊行されたされたもので、他に岩島公『秋元梅吉』（1985）、玉田敬次『熊谷鉄太郎』（1985）、阿佐博『中村京太郎』（1987）、赤坂一『鳥居篤治郎』（1988）等が出版されている。
- 3 他に岩橋についての簡単な紹介ではあるが、二、三例を挙げると、精神薄弱者教育史研究会編『人物でつづる障害者教育史』（日本文化科学社、1988）や谷合侑『チャレンジする盲人の歴史』（こづえ、1989）の中で岩橋も取り上げられている。また〈道ひとすじ〉編集委員会編『道ひとすじー昭和を生きた盲人たちー』（あづさ書店、1993）は近代日本の多くの視覚障害者の福祉や教育に貢献した人物を扱っており、岩橋もその中に入っている（87～92頁）。
- 4 ここでの彼の人生にわたる大凡の時期区分は今回便宜的につけたものにすぎなく、今後はもちろん個別的にそれぞれの時期の意味やその中の項目にそって詳細に論究していく必要があると考えている。
- 5 岩橋の生涯をみるにおいて、先述の『日本ライトハウス四十年史』（日本ライトハウス、1972）や関宏之『岩橋武夫』（日本盲人福祉研究会、1983）等のほか、自伝的な書物として『光は闇

より』や『母・妻・妹 女性に与ふ』等の書物、あるいは個別的な論文の中にも思い出が語られており、彼の処女作『動き行く墓場』は自伝的小説である。岩橋きを『菊と薔と燈台』（日本ライトハウス、1969）といった書物等を主に参考にした。

- 6 また岩橋武夫『光は闇より』（再版）（日本ライトハウス、1947）29頁。
- 7 日本における盲哑学校はじめ盲教育の歴史については、『世界盲人百科事典』（日本ライトハウス、1972）を中心に参照した。
- 8 岩橋武夫『光は闇より』（再版）（日本ライトハウス、1947）48～49頁。
- 9 岩橋に大きな影響を与えた熊谷鉄太郎（1883～1979）は北海道の生まれで札幌盲学校で学び、上京しクリスチャン（メソジスト）となる。好本督に邂逅し関西学院の神学部で学び盲人伝道・教育に尽力した。エスペ란トの普及にも尽くした。著書に『闇を破って』（1931）、『薄命の記憶』（1960）等がある。
- 10 好本督（1878～1973）は東京高商時代に内村鑑三から信仰の影響を受け入信する。オックスフォード大学で学んだ。弱視であったため視覚障害者の福祉活動に協力し、特に英国の該制度に精通し、それを紹介し日本の事業にも大きな貢献をした。熊谷のほか、中村京太郎や岩橋も大きな影響を受けている。著書に『真英国』（1902）、『日英の盲人』（1903）、『英国人と基督教』（1948）、『十字架を盾として』（1934）等がある。
- 11 盲目の詩人エスペランティスト、エロシェンコ（1890～1952）については高杉一郎『夜明け前の歌』（岩波書店、1982）を主に参照した。ちなみに高杉の著の参考文献には岩橋の『動き行く墓場』が入っている。臼井吉見の小説『安曇野』の舞台ともなった新宿中村屋の文化サロン

において、大正時代、いろんな人々との交友があることは有名である。また上述の熊谷鉄太郎や鳥居篤次郎らもエスペラント語に関心をもっている。

- 12 関は「エスペラントは、岩橋を、エロシェンコや鳥居に巡り合わせた。そして、西田とも親交を持たせた」（関宏之『岩橋武夫』15頁）と説明している。岩橋は著書や論文において西田や一燈園の理念や思想に共感をよせた文章を書いている。また一燈園の機関誌『光』においても岩橋は論文を書いており、西田宛の書翰も残されている。西田天香や一燈園との関係については別稿で論じたい。
- 13 文学部英文科については、『関西学院100年史』（関西学院）や文学部編集部編『文学部回顧』（関西学院文学部、1931）等を参照した。ちなみに『文学部回顧』には「第四回、第六回の英文科生が『関西文学』等に拠つて外部的に発展してゐた頃、この間にはさまつてどちらかと云へば社交的なグループを離れ、地味な生活をしつゝ、ハミル館時代の最後を飾つてゐたクラスがあつた。盲学生岩橋君を囲んだ四人、尤も三年の頃まで内藤憲隆君も居つたが、かうした少数のクラスである上に、皆詩的であり深い生活の体験者である佐藤教授なんかの指導もよかつたためか、各々現在各方面で特色ある道に各自の才力を伸ばしつゝある人達が育つていつた。友情と愛と勉学と詩的生活……或は寄宿舎の書齋に、さては学院上の山に、又はオゾリン教授の宅に、彼等は各自の生活を深めつゝ麗はしくも床しいクラスを作つてゐた」（53頁）とある。
- 14 『関西学院新聞』114号（1935年7月）に収載された岩橋談「愉快だつた寮の生活」という記事であり、彼の寮生活の一端を窺うことが出来る。
- 15 岩橋は『失楽園の詩的形而上学』（基督教思想叢書刊行会、1933）の「序」において、大阪市

立盲学校時代「その中でも按摩の時間、Hといふ教師の肩を揉みながら、『ミルトンの失楽園は失明して出来たものです。だから君だつて、さう失望するには及ばない』と聞かされた時の印象は永久に忘れることの出来ないものであつた」と、そして関西学院に入学しミルトン研究を本格的に挑戦し「秋の更くる夜さなど、我を忘れて読み入つた私は、指頭にある文学の世界がミルトンのそれか、自らのそれなるかを弁別し能はず、時空を隔つるとはいへ、同じく人の世の悲哀と運命の苦杯を思はずも涙を注ぐのであつた」と回顧している。

- 16 岩橋の卒業論文については、関西学院学院史編集室所蔵。
- 17 寿岳静子「朝」『寿岳文章・しづ著作集』1（春秋社、1970）所収、19～20頁。
- 18 岩橋『母・妹・妻 女性に与ふ』（日曜世界社、1933）88頁。
- 19 岩橋きをの著した『菊と薊と燈台』（日本ライトハウス、1969）には、きをの岩橋武夫との出会いまでのことや、一燈園生活のこと、そして圧巻は表題からも窺えるように、エジンバラ生活が克明に描かれていることにある。
- 20 エジンバラ大学の岩橋武夫に関する記録によれば、岩橋は1925年10月に入学し、1927年7月1日に卒業している。「PRELIMINARY EXAMINATION」によれば1925年10月13日の日に「Sertificate Granted under Section Viii」とある。「RESULTS OF EXAMINATIONS IN SUBJECTS」の項目をみると、1926年6月に「English」「Philosophy」、7年3月に「Junior Divinity」、27年6月に「Philosophy」「Moral Philosophy」（以上、点数記載あり）、5年10月に「English」（Exと記載されている）が記載されている。また「PARTICULARS OF ATTENDANCE」という項目をみると、「ORDINARY CLASSES」という箇所には「German」

「French」「British History」「Political Economy」、ハイレベルなクラスに相当すると思われる「HONOURS CLASSES」の箇所には「Inter German」「Inter French」「Final French」「Hon German I」「Hon German II」と記載されている。岩橋はこれらのクラスに出席したものと思われる。

- 21 この記事1926年8月30日に掲載されたもので『日本ライトハウス四十年史』（295～296頁）に日本語に訳されて掲載されている。
- 22 同上、293頁。
- 23 関西学院学院史編纂室所蔵史料による。
- 24 『朝日新聞』（1954年10月29日）に収載された寿岳の「亡友岩橋武夫を悼む」という記事による。
- 25 例えば北海道で、岩橋の講演を聞いて彼を慕い関学に学んだ本間一夫は日本ではじめて点字図書館を東京に設立し、戦後大きな貢献をした人物である。
- 26 キリスト教社会福祉教育や社会事業の理論史において名を残す竹中勝男も、この時期、岩橋と同様に、マルクス主義とキリスト教という比較研究をしている。
- 27 この「盲人科学」という言葉であるが、岩橋は「最近欧米専門家の間にはTyphlology或ひはPhilotyphlologyなる専門語が、盲人に対する科学的研究の学名として使用されつゝあるが、私はそれを『盲人科学』と邦訳を試み、本書の表題としたものである」（3頁）と説明している。
- 28 小室篤次（1870～1940）は青山学院卒業後、約40年間、ハワイやカリフォルニア、米国西海岸において主に在留日本人の為のキリスト教伝道を行った。また彼はヘレン・ケラーと知己になり親交があった。著書に『米大陸の二十五年』（新生堂、1927）、『聖者ダミアン』（教文館、1930）、『ヘレン・ケラー』（新生堂、1934）といった書物がある。『ヘレン・ケラー』の「序言」

において、ヘレンは「私は、常に日本人に対し、大なる関心を以て居ります。過去に於ける日本人の、多くの優れた功業者中で、特に、盲人教育に関しては、現代の方法が、発見せられない前から、既に数世紀の間、其国民に対して、人道的に、賢明でありました」云々と日本への関心の深さを記している。

- 29 『大阪朝日新聞』（1937年4月20日）
- 30 ちなみに関西の日程において、岩橋の母校である関西学院を5月14日訪問する。その件については『関西学院新聞』132号（1937年5月20日）が「奇跡の聖女ヘレン・ケラー女史は去る五月十四日午後二時青葉に煙る学院を訪れ多数の外來客を交えて、立錫の余地なき大講堂で彼女の最も愛する学生達への講演を行つた。ベーツ院長は世界で最も名高い二人の婦人を迎えた喜びを伝へた後頌歌五六六番亀徳礼拝主事の祈祷グリークラブの合唱に次いで文学部岩橋武夫氏の通訳により、トムソン女史からケラー博士の生立ちの苦心談があつた」として以下ケラーの講演の内容を簡単に紹介している。
- 31 『日本ライトハウス四十年史』（日本ライトハウス、1962）18～19頁。
- 32 『関西学院新聞』112号（1935年5月20日）
- 33 『黎明』は日本ライトハウスが所蔵され、戦後も続いて刊行された。この間生前中岩橋はほとんど毎号巻頭言を書いている。日本ライトハウスの御厚意により墨字に解読された岩橋論文を利用させていただいた。戦前だけみてもこの雑誌には竹中勝男や瀬尾真澄、石松量蔵、長谷川如是閑ら多くの知名の人物の論文が掲載されている。こうした雑誌の代表的なものに東京盲学校の『六星の光』がある。ライトハウス史、近代の障害者を含む社会福祉史のみならず、キリスト教史、近代史においても貴重である。
- 34 『社会事業研究』30—9（1942年9月1日）

- 35 『日本ライトハウス四十年史』 34頁。
- 36 かかる戦時中の日本の厚生事業との関連における岩橋への研究については、杉山博昭『キリスト教社会福祉の史的実践』（大学教育出版、2003）参照。
- 37 それより前、多分終戦まもなくころと思われるが、『日本ライトハウス四十年史』は次のような興味ある事実を伝えている。「米国よりヘレン・ケラー女史が、マッカーサー元帥に対し、大阪に岩橋武夫という友がいるが、どうしているか心配でならない。なんらかの方法で、すみやかに探しだし、もし生存しているならば、彼の仕事の上に絶大なる援助と協力を願いたい、と、いつてこられた」（41頁）というムリンス少将のライトハウスへの電話内容である。かかる経緯の中で戦後における二人の交友が再開されたのである。
- 38 岩橋英行『青い鳥のうた』（日本放送協会、1980）109～110頁。

※この論文を作成するにあたって、日本ライトハウスの方々、とりわけ早瀬真紀子氏、そして一燈園資料室の方々、西田天香研究家宮崎昌明氏、関西学院学院史編纂室の比留井弘司氏には史料閲覧お世話になりました。またEdinburgh University Library、Special Collections/ArchivesのIrene Ferguson氏には岩橋武夫に関する史料閲覧においてお世話になりました。厚くお礼申し上げます。なお、この研究は2007年度関西学院大学個人特別研究「岩橋武夫についての総合的研究」に依るものである。

